第8回『邪馬台国論』解明委員会

「神武東征」の事実解明

2021年8月28日

東京都中野区
可児俊信

筆者の事実解明のスタンス

事実解明のスタンス

■事実解明の材料

・文献・・・記紀、先代旧事本紀、魏志倭人伝
・考古学の知見・・・集落、土器、稲作、古墳、銅鐸・銅鉾　　他
・神社由緒

■材料解釈の際の留意点

・現代の常識・合理性にとらわれない
・文献の政治性に留意
　→同時代性(古い文献）の方が正確とは限らない
・怪物や祟りは実在しないが、祟りは信じられていた
　→怪物や祟りとされた事実・理由がある
・フィールドワーク重視

■考古学は科学となっていない

科学　再現性があり検証できないといけない

・藤村氏による旧石器捏造事件

・纒向の時代検証

神社由緒　祭神の実在可能性

神社祭神は実在人物の可能性が高い

番号	人名	神社名	生年	創設時期	備考
1	菅原道真	天満宮	845	919	後醍醐天皇の勅
2	安倍晴明	安倍晴明神社	921	1007	一条天皇の勅
3	豊臣秀吉	豊国神社	1537	1599	本人の遺命
4	加藤清正	加藤神社	1562	1611	廟から分離
5	徳川家康	東照宮	1542	1617	本人の遺命
6	佐倉惣五郎	宗悟神社	1653年頃	1752	佐倉藩
7	崇徳天皇	白峯神社	1119	1868	明治天皇
8	楠木正成	湊川神社	1294年頃	1872	明治天皇
9	織田信長	建勲神社	1534	1880	明治天皇
10	吉田松陰	松陰神社	1830	1882	門下生
11	明治天皇	明治神宮	1852	1920	東京市
12	乃木希典	乃木神社	1849	1923	信奉者
13	上山英一郎	除虫菊神社	1862	1930	尾道市民
14	東郷平八郎	東郷神社	1848	1940	信奉者
15	松下幸之助	松下幸之助社	1894	1998	椿大神社末社
注：主祭神として祀られていない人物は除く					
注：江戸時代の藩祖は除く					

記紀登場人物←実在人物(祖先）→神社祭神

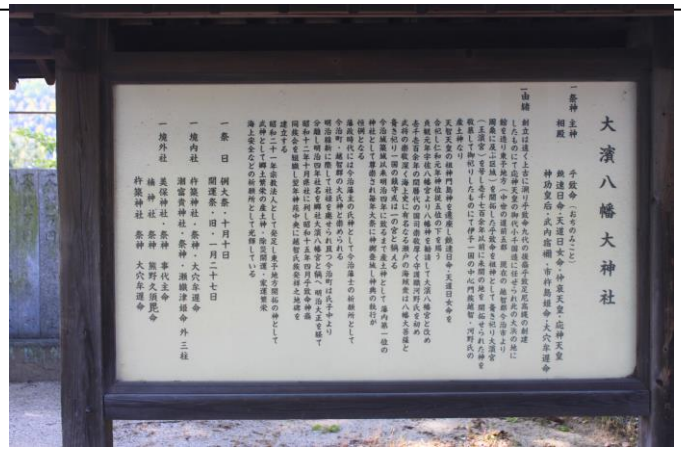
祭神の実在可能性(例)

祖先(実在人物）を祀る神社

大浜八幡大神社 （今治市大浜町）

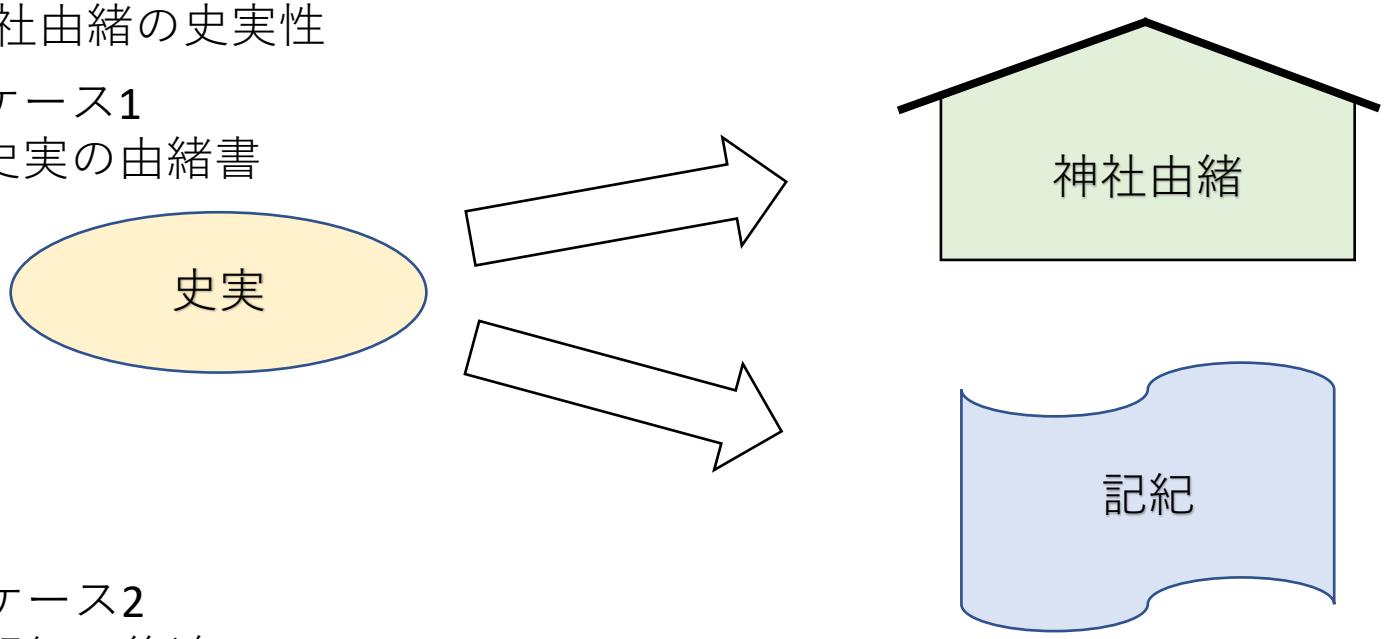
＜由緒書＞
御祭神　乎致命　(おちのみこと)
相殿　　饒速日命　天道日女命　仲哀天皇　応神天皇　神功皇后　武内宿祢命市杵島姫命　大穴牟遅命

・乎致命は饒速日の十代目に当たり、七歳の時に応神天皇より伊予国・小市の国造に任ぜられ、ここ大浜の地に館を構え、南海に武威を示し、東予地方を開拓した。
・乎致命九代の後裔乎致足尼高縄の創建。
・天智天皇の時に大島の津島にあった門島[つしま]神を遷座し、門島神社と号した。
・平安時代になって大分の宇佐八幡神社より八幡神を勧請して大浜八幡に改称した。

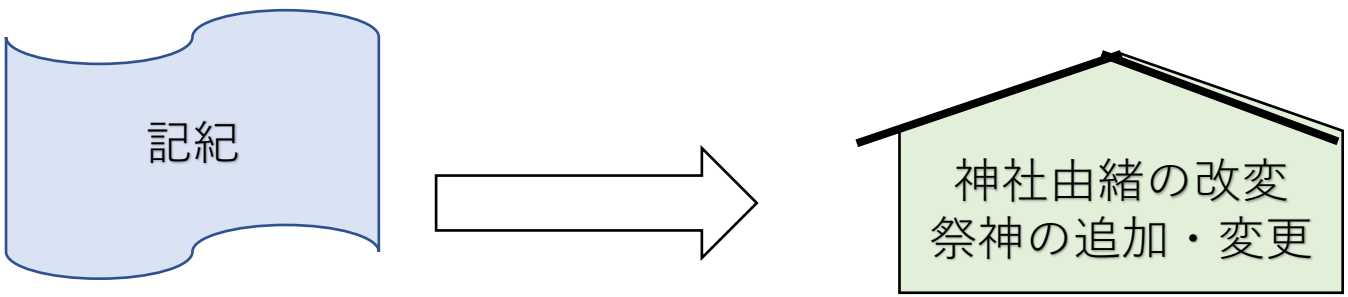


神社由緒の史実性

ケース1
史実の由緒書



ケース2
記紀の後追い

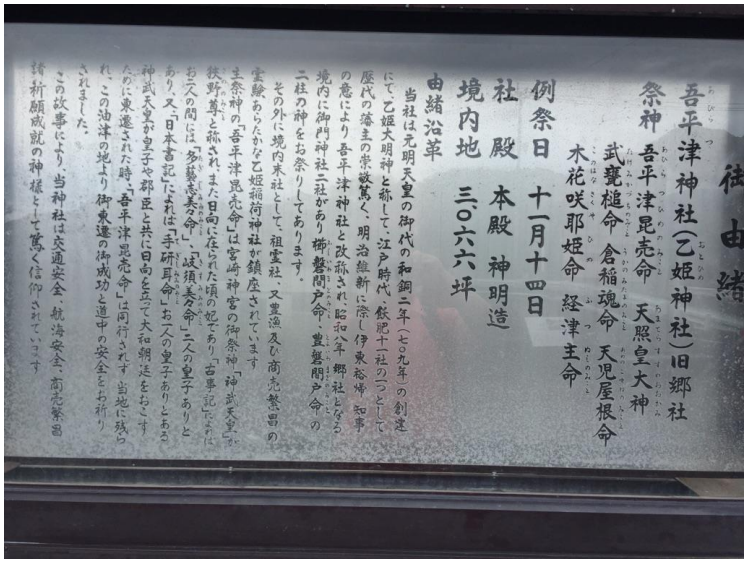


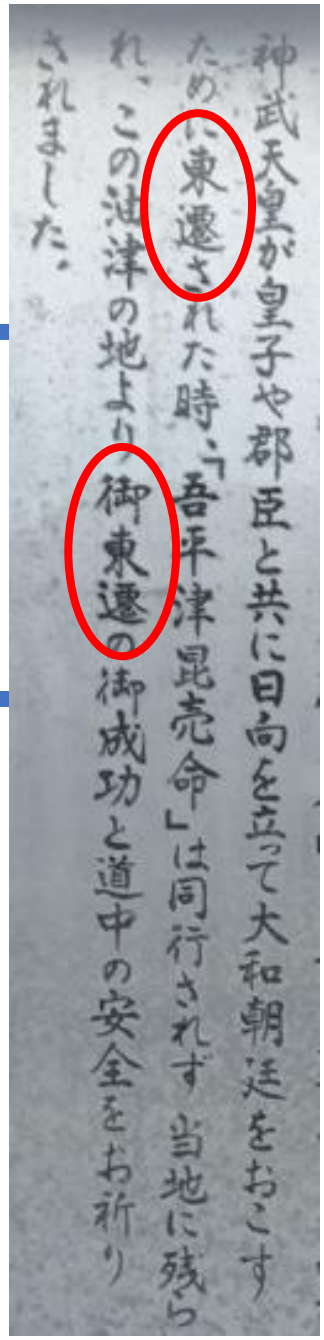
・国家の指示による記紀の正当性裏付け
・まち興し・便乗

例：天岩戸神社
(高千穂町)

例：鵜戸神宮

「神武東征」の史実性


御由緒
吾平津神社(乙姫神社)旧郷社
祭神 吾平津昆売命 天照皇大神
武甕槌命 倉稲魂命 天児屋根命
木花咲耶姫命 経津主命
例祭日 十一月十四日
社殿 本殿 神明造
境内地 三〇六六坪
由緒沿革
当社は元明天皇の御代の和銅二年(七〇九年)の創建
にて、乙姫大明神と称して、江戸時代、飫肥十一社の一つとして
歴代の藩主の崇敬篤く、明治維新に際し伊東裕邦知事
の意により吾平津神社と改称され昭和八年郷社となる。
境内に御門神社二社があり、御磐間戸命、豊磐間戸命の
二柱の神をお祭りしてあります。
その外に境内末社として、祖霊社、又豊漁及び商売繁昌の
霊験あらたかな乙姫稲荷神社が鎮座されています
主祭神の「吾平津昆売命」は宮崎神宮の御祭神「神武天皇」の
妃野乙女と称されまた日向に在られた頃の妃であり「古事記」にはこれ
お二人の間には「多芸志美美命」、「岐須美美命」二人の皇子ありと
あり、又「日本書紀」によれば「手研耳命」お二人の皇子ありとある。
神武天皇が皇子や郡臣と共に日向を立って大和朝廷をおこす
ために東遷された時、「吾平津昆売命」は同行されず当地に残ら
れ、この油津の地より御東遷の御成功と道中の安全をお祈り
されました。
この故事により当神社は交通安全、航海安全、商売繁昌
諸祈願成就の神様として篤く信仰されています


神武天皇が皇子や郡臣と共に日向を立って大和朝廷をおこす
ために東遷された時、「吾平津昆売命」は同行されず当地に残ら
れ、この油津の地より御東遷の御成功と道中の安全をお祈り
されました。

記紀「神武東征」の記述の史実可能性

＜「神武東征」の記紀での趣旨＞

・天皇家は九州から来た貴種である。
・原ヤマトの前支配者に代わってヤマトを支配し、今に続く。

＜東征の史実性に関する選択肢＞

1　記述は全くの創作

2　史実をもとに脚色(九州から貴種が東征した）

3　概ね史実どおり（後に神武天皇と呼ばれる人物が東征した）

＜邪馬台国の所在論＞

- 邪馬台国畿内説
- 邪馬台国九州説
  - 邪馬台国東遷
  - 原ヤマト西遷

邪馬台国（九州国の中心地）は移動している

「東征」の理由

東征の理由

1　**東征(武力による侵攻）か東遷(原ヤマトの同意を得ている）か**

＜記紀での武力衝突の記述＞

・長髄彦や紀伊半島の小領主のみで、原ヤマトとはなし

＜先代旧事本紀の記述＞

・饒速日は東征

2　**東遷した者**

①九州国本体

②九州国の貴種の一派

記紀の記述では大規模感はない

3　**東遷時期**

①１回

②波状的　　すくなくとも饒速日(遠賀川周辺の勢力）、神武の２回

4　**東遷の理由**

①大陸の影響を回避するため東に移動（東遷・東征）

②大陸に対抗するため原ヤマトとの国内統合(東遷）

③寒冷化(１～２世紀）に伴う食糧不足に伴う侵略(東征）

④九州国の分裂(東征）

記紀での記述

ヤマト統合の過程(仮説)

ヤマト統合の過程(仮説)

ヤマト統合の過程(仮説）　3世紀

ヤマト統合の過程(仮説）　4世紀前半

ヤマト統合の過程(仮説）　4世紀前半

九州国消滅（大和による統合）

その後、天照大神、倭大国魂の二神を、天皇の御殿の内にお祀りした。ところがその神の勢いを畏れ、共に住むには不安があった。
そこで天照大神を豊鍬入姫命に託し、大和の笠縫邑かさぬいのむらに祀った。
また日本大国魂神は、淳名城入姫命に預けて祀られた。

「東征」の経路

出発地「日向」の位置

	宮崎県	福岡県
所在	宮崎市付近	伊都国日向峠,日向川
根拠	古事記の記述、記紀の日向３代とのつながり	邪馬台国が北九州にあったらしいので、出立地も北九州 神武の東征航路は宮崎からでは不自然
記紀	古事記 「神倭伊波禮毘古命與其伊呂兄五瀬命二柱、坐**高千穂宮**而議云「坐何地者、平聞看天下之政。猶思**東行**。」卽自**日向發、幸行筑紫**。」	日本書紀 「治此**西偏**」「其年冬十月丁巳朔辛酉、天皇親帥諸皇子舟師**東征**。」

東征の経路と神社由緒

松江
鳥取県
出雲
京都府
京都
滋賀県
島根県
岡山県
兵庫県
大阪
倉敷
神武天皇社
竜山神社
香川県
大将軍神社
山口
徳島県
和歌山県
佐野
四国
愛媛県
福岡
柏鼻神社
福岡県
高知
高知県
早吸の門
別府
久留米
大分
大分県
熊本
五瀬川
熊本県
都城
鹿児島

南九州地域の東征に関する神社伝承

日向北九州説なら創作
日向南九州説なら史実

南九州地域の東征に関する神社伝承

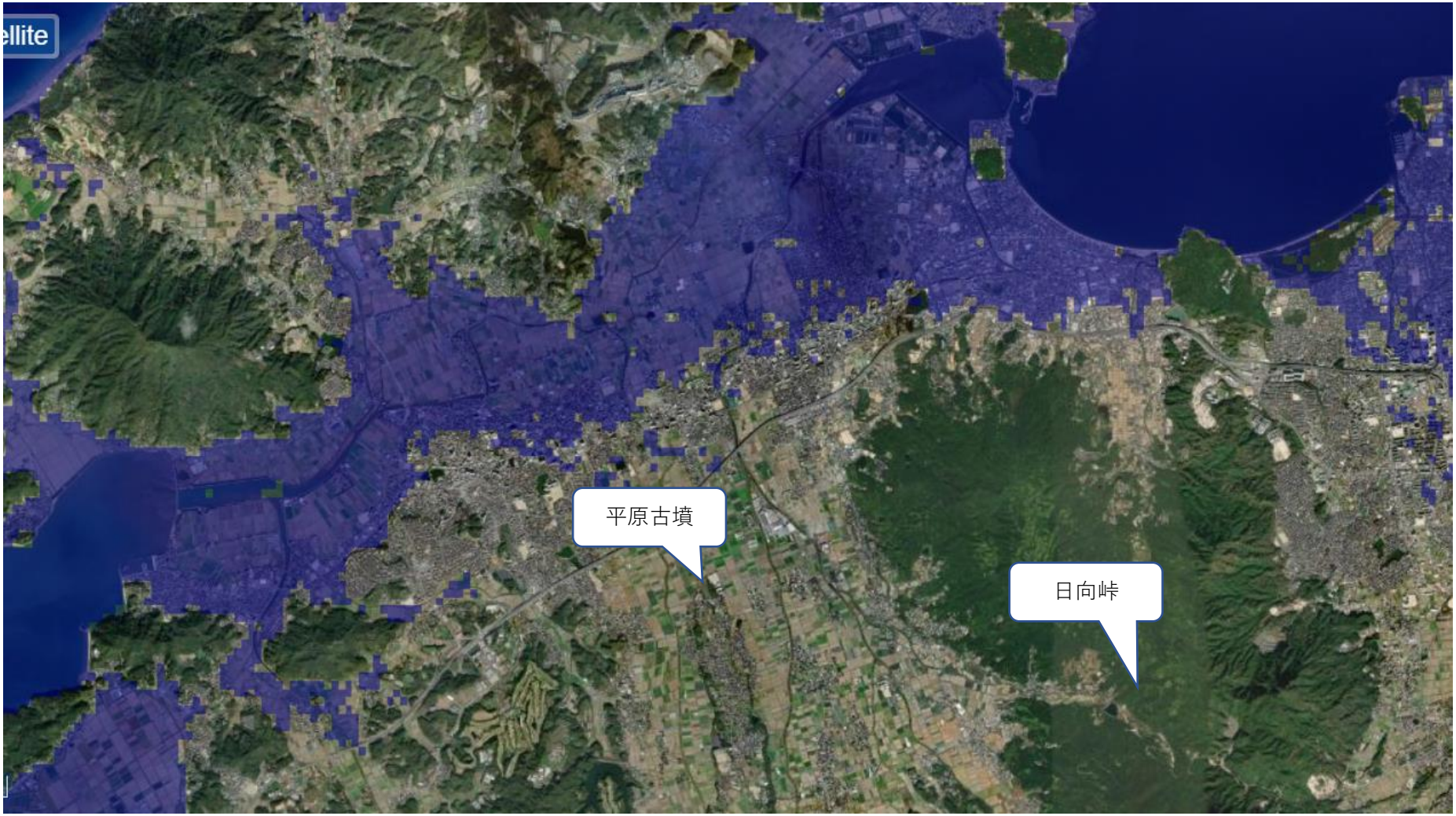
美々津地区での神社伝承

事象	場所	住所
船出	美々津港	日向市美々津町
航海安全祈願	立磐神社	宮崎県日向市美々津町３４１９
航海安全祈願	湊柱神社	宮崎県日向市幸脇
出港時の気象を調査	凧あげ	日向市美々津町
出航時刻の繰り上げ	おきよ祭り	日向市美々津町
出港時の食料準備	つきいれ餅、お船出団子	日向市美々津町
神武天皇の衣服の繕い	立縫タチアイの里（美々津の別名）	日向市美々津町

日向峠の位置

奴国？
平原古墳
伊都国
日向峠
福岡市
糸島市
西区
福岡アイランドシティ
能古島
野の花学園
日本赤十字社
今津赤十字病院
福岡県立玄洋高
福岡舞鶴高
福岡女子高
福岡山王病院
西南学院大
九大学研都市
西福岡病院
糸島医師会病院
糸島市立波多江小
福岡県立筑前高
福岡リハビリテーション病院
福岡県立福岡講倫館高
福岡県立糸島農業高
糸島高校前
筑前前原
美咲が丘
南風小
医療法人 愛光会 原田病院
糸島市立 前原東中
ザ・クイーンズヒルゴルフクラブ
福岡雷山ゴルフ倶楽部
糸島市立怡土小学校 王丸分校
福岡市立金武小
福岡市立金武中
福岡市立四箇田小
福岡市立入部小
西部運動公園
牟田病院
一貴山保育園
糸島市立長糸小
Google

日向峠の位置



http://flood.firetree.net/

海水面を5ｍ上昇させた地図

日向峠の位置

伊都国歴史博物館　屋上から東南東方面を撮影

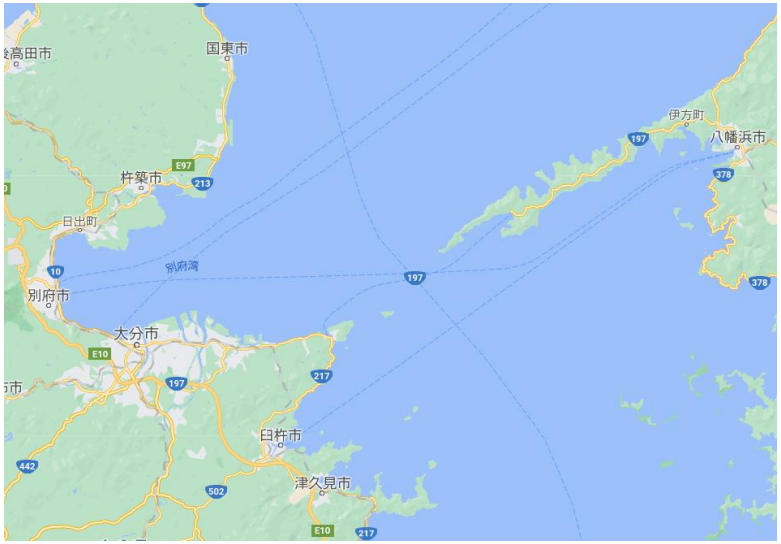
日向三代

①天孫降臨
②ニニギと木花開耶姫との結婚、岩長姫への拒絶による人間の短命化
③木花開耶姫の一夜での妊娠と火中の出産
　・子　火照命（隼人の阿多君の祖神）海幸彦
　・子　火須勢理命ほすせり
　・子　火遠理命ほおり（天津日子穂穂手見命）　山幸彦
④海幸彦・山幸彦の釣り針交換
⑤山幸彦の海神宮の訪問
⑥山幸彦と豊玉姫の結婚
⑦潮満珠と潮千珠（しおふるたま）による海幸彦の服従
⑧豊玉姫のサメの姿での出産
　・子　鵜葺草葺不合
⑨鵜葺草葺不合と玉依姫の結婚
　・子　五瀬命
　・子　稲氷命
　・子　御毛沼命
　・子　若御毛沼命（豊御毛沼命、神倭伊波礼毘古）

・日向三代の記述は、南方神話の寄せ集めであり、史実性なし
・神武東征の出立地が日向であるとするため日向三代に設定された

「速吸門」の位置

	古事記	日本書紀
到着順	吉備ー速吸門ー浪速渡	日向ー速吸門ー宇佐
該当する海峡	明石海峡	豊予海峡
東征出立地	南九州、北部九州いずれも	南九州でないと不自然
出会う人物	名はない（槁根津日子の名を賜る）	珍彦（椎根津彦の名を賜る）
伝承	保久良神社の祭神のひとり	椎根津彦神社の主祭神
根拠	応神代に椎根津彦の後裔が明石の国造に任命(先代旧事本紀)	珍彦の出世を知った地元民が珍彦の住居跡に神社を設置（椎根津彦神社伝承）



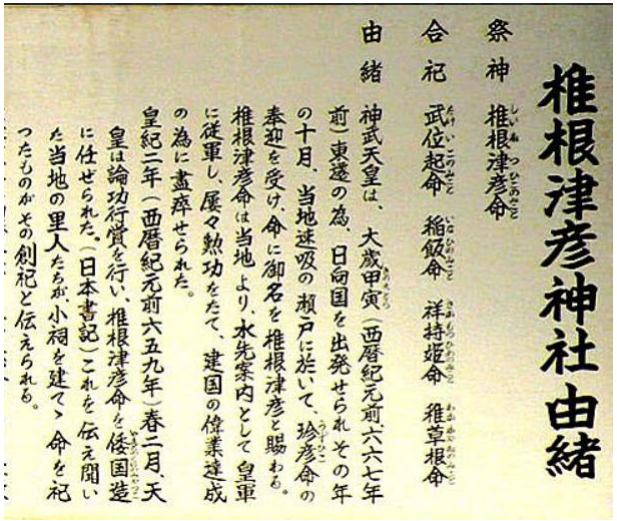
「速吸門」の位置

＜日本書紀＞
神武二年春二月二日、天皇は論功行賞を行われた。
・道臣命ミチノオミノミコトは宅地を賜わり、築坂邑つきさかのむらに居らしめられ、特に目をかけられた。
・大来目を畝傍山の西、川辺の地に居らしめられた。現在、来目邑と呼ぶのはこれが由来である。

・椎根津彦を倭国造とした。
・弟猾に猛田邑を与えられた。それで猛田の県主という。これは宇陀の主水部の先祖である。
・弟磯城、名は黒速を磯城の県主とされた。
・剣根という者を、葛城国造とした。
・八咫烏も賞の内に入った。その子孫は、葛野主殿県主がこれである。

古事記には、論功行賞の記事なし

「速吸門」の位置



椎根津彦神社由緒

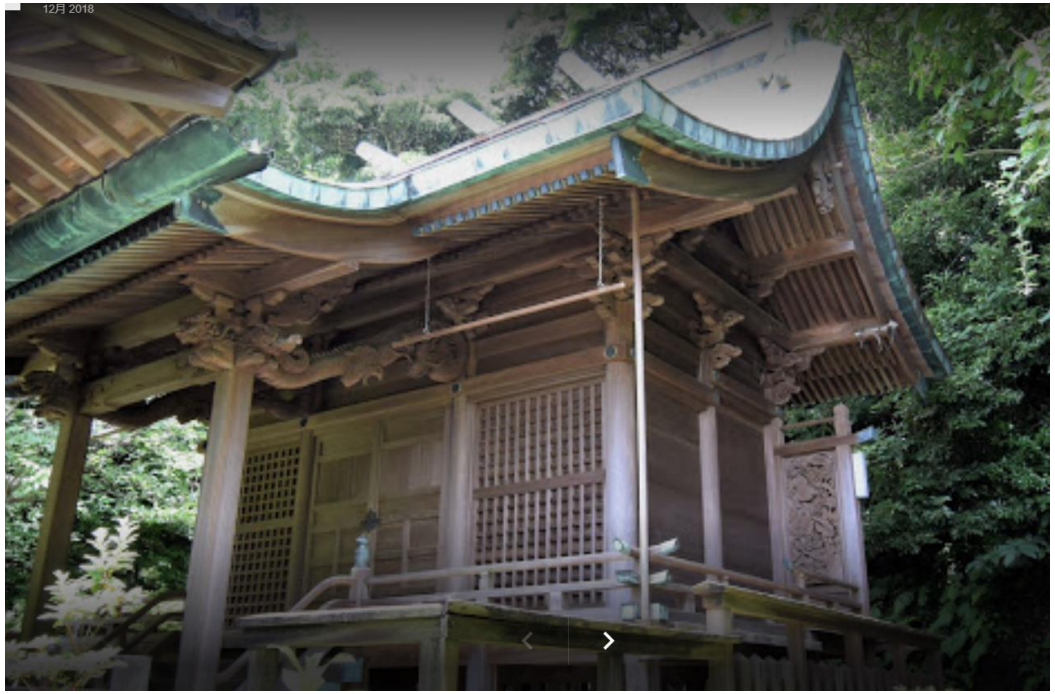
祭神　椎根津彦命

合祀　武位起命　稲飯命　祥持姫命　稚草根命

由緒

神武天皇は、大歳甲寅（西暦紀元前六六七年前）東遷の為、日向国を出発せられ その年の十月、当地速吸の瀬戸に於いて、珍彦命の奉迎を受け、命に御名を椎根津彦と賜わる。椎根津彦命は当地より、水先案内として皇軍に従軍し、屢々勲功をたて、建国の偉業達成の為に盡瘁せられた。

皇紀二年（西暦紀元前六五九年）春二月、天皇は論功行賞を行い、椎根津彦命を倭国造に任ぜられた。（日本書紀）これを伝え聞いた当地の里人たちが、小祠を建て命を祀つたものがその創祀と伝えられる。



神武東征のその他の疑問

	日本書紀	古事記
国平の神剣	熊野の高倉下がフツノミタマ(神剣）を神武に献上	熊野の高倉下がフツノミタマ(神剣）を神武に献上
八咫烏	天照大神が先導として八咫烏を手配	高木神が先導として八咫烏を手配
金のトビ	トビの光が長髄彦軍を目くらまし	-

参考：日本書紀の成立背景

①氏族ごとの伝承の整理・・・天皇家の正統性の確保

②藤原氏の優位性の誇示・・・物部氏からの転換

③祖先崇拝から仏教への転換の正当性を確保

④持統天皇即位、子孫即位の正当性を確保

⑤中国への対抗（国家的正当性の誇示）